

十月の人形揃



文楽座

四つ橋畔

おき

勝ちぬく誓言

みたまわれ大君にすべてを捧げまつらん
みたまわれすめらみくにを護りぬかん
みたまわれ力のかぎり働きぬかん
みたまわれ正しく明るく生きぬかん
みたまわれこの大みいくさに勝ちぬかん

十 月 人 形 淨 瑠 璃

晝 夜 二 部 興 行

—— 太 夫 三 味 線 ・ 人 形 總 演 出 ——

(夜 の 部)

三 七 半 勝

艷

容

女

酒 屋 の

舞

衣

段

伊 賀

越 道

中 双 六 陣

政 右 衛 門 邸 の 段 迄
大 廣 間 の 段 迄

出

軍 人 援 護 強 化 運 動 参 加 作 品
西 作 詞 並 二 作 曲
大 塚 茂 三 舞 臺 装 置
堀 茂 三 舞 臺 装 置

戀 女 房 染 分 手 綱

重 の 井 子 別 の 段

(晝 の 部)

繪 本 太 功 記

二 條 城 中 配 膳 の 段 迄
妙 心 寺 の 段 迄

新 作

晴 着 の 子 寶

跡 松

鷗 山 古

中 條 姫 雪 責 の 段

軍 人 援 護 強 化 運 動 参 加 作 品
大 塚 克 三 舞 臺 装 置
西 作 詞 並 二 作 曲

昭 和 十 八 年 十 月 一 日 初 日
初 日 晝 十 一 時 ・ 夜 四 時
毎 日 晝 十 二 時 ・ 夜 五 時 二 部 開 演

・ 御 觀 覽 料 ・

晝 の 部
一 等 席 二 圓 五 十 錢
二 等 席 一 圓 三 十 錢 上 上
三 等 席 一 圓 二 十 錢
(各 等 入 場 稅 別)

夜 の 部
一 等 席 三 圓 五 十 錢
二 等 席 一 圓 三 十 錢 上 上
三 等 席 一 圓 二 十 錢
◇ 初 日 各 等 約 二 割 引 ◇
(各 等 入 場 稅 別)

一 等 御 座 席
一 等 椅 子 席
前 賣 切 符 發 賣 致 し 居 ます
は 五 日 前 より

前 賣 切 符 專 用 電 話
南 〇 七 七 番
一 般 御 用 の 電 話
南 〇 三 〇 三 番
南 〇 三 七 八 番



【畫の部】

繪本太功記

二條城中配膳の段

二條城配膳の段より
妙心寺の段まで

武智光秀 竹本 伊勢太夫
小田春永 竹富 太夫
森蘭丸 竹本 播路太夫
武智重次郎 竹本 越名太夫
(豊) 豊澤 新太 二郎

人形役割

小田春永 吉田玉市
森蘭丸 吉田玉徳
武智光秀 吉田玉助
武智重次郎 桐竹紋司

寛政十一年七月十二日(二四五九)から大阪道頓堀豊竹若太夫の芝居に上演された。作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒。全曲十四段よりなり、第十段目(十日目の)夕顔棚の尼ヶ崎の段が有名である。題材は明智光秀謀反の顛末を仕組んだもので「繪本太閤記」に據り脚色されてゐて、太閤秀吉に關する多くの戯曲中、最も世に知られたものである。尙、全十四段の構成は、所謂光秀の蘇鐵の諫言を發端にして、天正十年六月一日の安土城饗應の日の意趣から、本能寺の變となり、同じ十三日小栗栖に百姓の竹槍に哀れな最期を遂げるまでを十四冊に脚色してゐる。

梗概

天正十年六月上旬小田春長父子が上洛した。お

本能寺の段

人形役割割

竹鶴本長尾太夫
竹澤友平
鶴澤叶太
鶴澤友太

小田春永 吉田玉市
阿能の局 桐竹龜松

森蘭丸 吉田玉徳
森力丸 吉田兵次

こし元しのぶ 吉田兵二

茶道宗祇 吉田多三郎
三法師君 桐竹紋二郎

局註進の段

前竹本文字太夫
後竹本友十郎
竹鶴澤友三太夫
鶴澤友衛門

上では浪花中納言兼冬を春永の邸に遣はされた。その御使者饗應役を武智光秀、森蘭丸が承はつた春永は兼ねて光秀を疑ひ悪んで之を蘭丸に語つたので、蘭丸は光秀父子に故意に恥辱を與へ、而も春永に命じられ森蘭丸は光秀の額に疵を與へた。光秀は無念を押へ畏つて春永の無情を諫めるが、反へつて怒れる春永の爲めにその領地まで召上げられる。

光秀は默然として煩悶し、四王天は憤怒して謀反を思ひ立つた。斯くして遂に意を決した光秀はここに主君春永へ反旗を擧げる。

尾田春永の本陣本能寺では、阿野の局が抱いて來た春永の孫三法師を中に酒宴は酣はであつた。阿野局は能班女を舞うて賑はひ、奥女中しのぶは森蘭丸を慕うてもつれ合つた。歡樂の夢も短い夏の夜の東雲近い頃、光秀の兵四千餘騎本能寺を襲つて來た。春永の兵三百餘人。さしもの靈場本能



人 形 役 割

眞 柴 久 吉 吉 田 玉 助

浦 邊 山 三 郎 吉 田 玉 男

玉 露 桐 竹 紋 司

阿 能 の 局 桐 竹 龜 松

清水長左衛門切腹の段

野 竹 住 太 夫
豊 澤 呂 吉 三
豊 澤 仙 太 夫

人 形 役 割

眞 柴 久 吉 吉 田 玉 助

安 國 寺 惠 慶 桐 竹 政 龜

清 水 長 左 衛 門 吉 田 光 造

小 早 川 高 景 吉 田 小 兵 吉

女 房 や り 梅 桐 竹 紋 太 郎

寺も修羅の巷と化し、蘭丸を初め小田の手兵は全滅した。春永は今はいまだと自ら刃に伏し、力丸、坊丸等も追ひ腹を切つて果てた。

君、君たらずとも臣、臣たらねばならぬ。斯くして光秀は大逆無道、天人共に赦さぬ身となつた。

清水長左衛門宗治の高松城は眞柴久吉の軍に圍まれて水攻めに苦しめられてゐた。そして高松城救援に向つた郡家の名將小早川高景の軍も、久吉の水攻めの計には手の出し様もない有様であつた。

そして高景は久吉との和睦を決心した。

郡・高松兩城の使者となつて惠慶法師と宗治の妹玉露の兩人は、加藤正清の取次ぎで眞柴久吉に逢ひ、高松城主清水宗治への書狀を預つて歸つて行つた。

折節、阿野の局が久吉の館に駆け付けて本能寺

軍 兵 大 ぜ い
妙 心 寺 の 段

口 奥
竹野 竹野 竹野 竹野
津磨 越名 勝太 鶴澤
太 郎 太 郎 太 郎 太 郎
八 夫 郎 郎 郎 郎

人 形 役 割

武 智 重 次 郎 桐 竹 紋 司
嫁 初 菊 桐 竹 紋 太 郎
母 さ つ き 吉 田 小 兵 吉
妻 操 桐 竹 龜 松
四 方 田 但 馬 守 吉 田 玉 德
武 智 光 秀 吉 田 玉 助
軍 兵 大 大 吉 田 玉 助
こ し 元 大 大 ぜ い

の變を注進し、春永公御最期の様子を語り御形見の旗を渡したまま痛手に殞れた。

惠慶は小田・郡兩家和解の仲介者となつた。かくて宗治は久吉の陣館に來り、味方の助命を懇請して腹を切つた。久吉は宗治を扶けて高處に登らせ高松城の圍の水を切つて落した。長期の戦ひに悩み抜いた敵味方は何れも和戦の歡びにどよめき渡る聲の中に長左衛門宗治は息を引き取つた。

武智光秀は春永父子を弑して妙心寺に立籠つた長男の重次郎は許嫁の初菊と睦まじく語り合ひ、老母さつきは我が子の不忠を憤つて賤の女妾で館を去つて行く。光秀は良心の呵責におびえ、辭世を残して自殺しようとするが、重次郎、四王天に諫められて思ひを翻し、久吉を迎へ討つ軍を進める決心をする。

軍人援護強化運動参加作品
西亭作詞並ニ作曲・大塚克三舞臺裝置

新作 晴着の子寶

(床本) 晴着の子寶

竹本 桐生太夫
野澤 吉五郎
豊澤 猿二郎
レ(竹澤 仙團 松作)

人 形 役 割

質店の主	庄兵衛	吉田 玉市
女房	おとく	桐竹 紋太郎
丁稚	太留吉	吉田 玉男
母	お節	吉田 光造
娘	よし子	吉田 龜夫
床屋	の龜	吉田 玉徳
町の世話方		吉田 兵二
越後獅子		桐竹 紋司
嘶し方		吉田 藤一

慌だし、年の瀬越しも明けの春、屠蘇に機嫌のいつも
さえ戦の中と國民は、さすが心も七五三の内、元日も昨
日と過ぎて早二日酔もせず今日この頃を、佛頂面の庄兵
衛が、仕末質店商ひの算盤取つて打ちつぶやき

庄「エ、こりやまあ何の事暮れの流れ仕末と受拂ひ倍に
も漸々精一ばい、これでは利にも廻らぬわい、どれも
これもろくな物持つて寄來さん、コリヤ太留吉、太留
吉」

太「はい」

庄「はいじゃないわい、おとくは何處へ行つたのじゃ」
太「かみさんはいつものお寺詣りに」

庄「何じや寺參り、正月早々ろくでもない、世間は戦争
の最中じやぞ、バルバル艦隊が來るといふに旅順はま
だ落ちもせず、こちとらも氣が迷入るに寺詣り所の厭

「ぎかい」

太「旦那さん、バルバル艦隊じゃない、バルチック艦隊」

庄「エ、生意氣な事ぬかすない、おのれもぐずぐずして居ずと河岸裏の大王が店賃、明くれば早々拂ふ約束、サア早ふ行つて取つて来い」

太「旦那さん今日はまだ正月の二日、あんまりそれでは可愛想な」

庄「何じや可愛想な、こりややいこりや、店子が店賃拂ふのは當り前の事じやないかい、明けたら早々拂ふといふによつて、元旦だけはまつてやつたがまだ慈悲心二日でも三日目でも年が變れば明けたのじや、主人の言ひ付口返事せず、早ふ行て取つて来い、店賃取つて來たればな、まあ一日は敷入りさそサア行け、エい行かぬか」と

むやくや腹のハツ當り、しかり飛ばされ太留吉は、わがえくゝに門慾な、盆も正月も泣き顔に、コリヤ助からぬ庄兵衛と、つぶやき聲も内所の裏にへこそ走り行、折も表戸ガラゝと這入るは町の世話方衆、それと見るよ

り

「これは庄兵衛さん、お内にござりまするか、まづお目出度ふ、とは言ふものの、正月とは云ひながら國をあげての今度の戦争、旅順の安否も分らぬ内に、祝ひの言葉も何とやら、マア相かわりませずよろしう」

といふ挨拶の腰折つて、

庄「ア、申し、皆さん、何ぼ戦争のさ中じや迎、正月は年の始め目出度事に變りはない、やゝこしい挨拶は春早々縁起が悪い、いつそ置いてもらひます、用事有りそな、皆さん連れ、用なら早ふ聞きませう、がな前以てお斷りしますが、寄附の事なら松取れてから其外に何御用」

とふつり話の詰め煙管、火箸にほじくりすつぱりと、やにさがつたる憎まれ口、むつとはすれど世話方衆、わざととぼけて氣を直し、

「ヤこれはお正月早々お氣に障つた言葉の不用意、御詫び申し上げませふ、そう申されては、話しくい事ながら、實はこの町内の植徳が息子の健三さん、暮れの三十日に召集が参りました」

庄「ナニ赤紙が来た」

「ハイ、この町内では今度が始めて、名譽な事と皆々が心斗りの祝もの、こちら様にも應分の、御配慮お願ひ申しとふそれで參上致しました」

と云へ共つんと返事さへ上目使ひののさり聲、

庄「イヤコレ皆の衆、誰れが極めたか知らぬけれ共、前もつて相談もなく、押し付がましい今の話し、するならするで勝手にする、名譽」といひなさるが、戦さの始めに來てこそ名譽、今頃來るのはその様に大きな顔も出來ぬもの、じたい兵役にある者に御召しの來るに不思議はない、當り前の事じやないか」

とへらぬ小理窟つこふどにたまりかねて庄屋の龜

龜「ヤイ／＼強慾め、最前から聞いて居りや、乙に

すましたへつぽ理窟、早い遅いといふたとて名譽に變りはあるものけえ、どれ程心あせつても御召しがなければ仕方がねえ、それになんだつくさと、出すのがいやならいやでいい、やいつとても付き合ひに、直ぐにや納まらねえてめえ内、初つから氣のむかねえこのおれも、外の事と違ふと言ひ同じ町内と思やこそ、言

葉をかけてやつたのを、禮もぬかまざるや何でえ、殊更目出度出征に、聞き捨てなんねえ今のほげた、わりやマア唐變木か日本人か、今でこそこの町にこふして居れど、このおれは元を正しや東京の淺草生れの江戸ツ子でえ、ならぬ勘忍なほなんねえ、サアこふしてくれる」と

節くれし拳上ぐれば肝つぶし、頭かかえて奥の方、もふよいいのふと人々に抱き止められ庄屋の龜、万年ならぬ殘念と手足振り／＼出て行く、いとどさえ寒き身そらを給せ着の、つづれの布も世の中を、憂き苦勞かや目を病みし四十路計りの母の手を、勞はり引くも孝行の道を一筋とぼ／＼と七ツ計りのやつれてし、姿も哀れ娘子が立止りたる質屋の門、

「母アちゃん、あたいのべを縫ひに來た、先度の御内はもふここよ、早ふきれいなおべ着て、みんなと羽根突き嬉しいな」

「ヲ、嬉しい／＼、もふきれいに縫えて居るである、すぐに歸つて着せて上げよふ、おとなしうして居なされや」

「ハイ」と

返事も嬉しげに、親の心もぐわんぜなき、知らぬ子供は表戸を、ぐわらり明けるも無心なる、

・「御免下さりませ〜」と

音のふ聲に主の庄兵衛こわ〜うかごふ店の方

「唯方じやな」

「ハイ先度御世話になりました土手下の山田でござります」

「ウン山田ヲ、左様か、三月斗り前に來た御内儀さんか」

「ハイ其節は有難ふございました、暮れにお伺ひ申す筈、病ひ上りに目を病ひつい出そくれ、正月早々如何とも存じましたが、是非にお願いひ申し度厚かましふ参りました」

「常の年なら休む時もあるが、この非常の世の中がこちらの内では猶商賣、して正月早々見えたからは、先度の晴衣受け出しかな」

「ハイ實はその受出しの事」

と半分聞いて庄兵衛は、帳簿繰り〜算盤のけたの音さ

へ胸に釘、ぼつちりばかりと置き仕舞

「エ、拾綿入女着物四枚、同じく女物羽織二枚、それに子供の着物一枚、メて七點、左様じやな」

「ハイその子供」

「エ、元利合計」

「ア、もし、ほしいは子供の着物一枚、それだけお願ひ申し度ふ」

「ア、これ〜、そんならそれ一枚だけか」

「ハイ外の物は入りませぬ」

「あの中で金目のあるのはその子供着が一番じや、それだけに、入れ金も高い、又利息は外の全部ももらひますぞや」

「あの實は爰に有りますのが、内のお金の精一ぱい、足りぬ所は何れまた、達者になつたその上で、きつと御返し申します」どうぞこれにて御勘定」と

帯に差込用意の金、おづ〜出せば主は取り上げ、中抜き一枚が金高もの、それに利息だけでも二圓餘り、特別に心してもメて六圓八十錢、これでは出来ぬ相談

事

と云はれてはつと差し迫る、いとし子供^{こども}の慈愛には、心も強く取り直し涙の聲をかみしめて、

「申し旦那様、御無理に無理なお願ひながら、そこを御慈悲でござります、主は去年三月に召集受けて門出の後、近所の人の親切に私は洗ぎ賃仕事、どふやら送る其日過ぎも、思はぬ伏した病ひの床、可愛や此子が孝行の辻占賣つて町から町、人の情けに雨の日も風の日さへも分ちなく、漸々戴く幾何も薬と變る不甲斐なさ、この娘の孝に漸々と床を拂ひし今日この頃、この眼も醫者の情けにて、必ず治るとあるからは、元の體になつた上、きつとお拂ひ申しませふ、ここに有る丈けお情けに、わたしのものはどふなつても、せめて此子の正月の晴れ衣一枚御願ひ、子を持つものの親心お察しなされて下され」

と切なき涙幼子に、見せじと口にかみしめる、聲もおろ／＼、主の女房奥より出て

「ア、氣の毒に、私は寺詣りから令歸り、仔細は聞いて居りました、いたづら盛りの年頃に、辻占賣つて手

助けとは、孝行過ぎた娘の子、なんの／＼其心配には及びませぬ、又お前さまの着物もその姿では寒かるふ共にもろふて上げませふ、健者になつた其時に、いつでも持つて来て下され、のふぢいさん」

「エイやかましいわい、又しても出しやばり奴、店の事はわしの役、お前は奥の用をせい、毎朝／＼お詣り／＼と、ろくな説教聞いて來ぬ」

「それぢやと言ふてお前さん情けは人の爲ならずと」エイ己れの爲にもなるものかい、これ内儀さん、こちとらは遊びじゃない、お上より鑑札受け立派に税金拂ふて行く暖簾掛けた質商賣、情けは情け、商ひは商ひ泣きの涙に引きづられてつぶれた質屋はたとある、これも慈悲じゃ、あれも可愛想じゃといふて居ては、二進三進口が干上る、金が出来たら出ませふ、正月早々泣き入れとは縁起でもない初夢じや」

と、取り付く島も拾小舟、梶も渚さの笹蟹が、横に泡ふく／＼、面、時に表の賑はしく丁稚の太留吉轉び入り、

「旦那さん／＼大變／＼、えらい事ぢや／＼」

「エイ門口からやかましい、何じやか知らぬが氣がめいりかけて居る、頭が痛い、靜かにせい」

「エ、これが静かにして居られますか、旅順が落ちた
 〳〵難攻不落の旅順が陥ちた」

「エッ、なんじや旅順が陥落、そりやほんとにか」

と、一瞬に言葉も泣く音打ち忘れ、母も思はず詰める息

「ほんとともうそもございません、それアノ號外の鈴の
 音、昨日の元日の夕方前、それ近づいた鈴の音號外も
 るふて來ませう」

と一散歩り太留吉は、日本勝つたとかけり行く、

「婆さん〳〵旅順がとふ〳〵本當に落ちた、あの難攻
 の旅順が陥ちた、えらい事じや〳〵」

「コレぢいさんお前さんでも嬉しいかい、ほんとにお
 前も嬉しいのかい」

「馬鹿ッ、何ぬかすのじや、日本人である限り、これ
 が喜ばずに居られふか、難戦〳〵の長い月日、この薩
 には、十幾万といふ戦死者の方、司令官の乃木大將ま
 でいとしい子達をお二人とも」(ここで主、言葉詰り
 母娘の姿をじつと見る、しばらく見くらべて居た女房が
 やがて静かに)

「ぢいさん、兵隊さんのお蔭なりやこそ、この様に安

樂に松七五三飾りの居正月、聞きやあの方の連合も戦
 地へお出でと云ふ話し、日本人であるなれば、のふぢ
 いさん」(しばらく無言主忍び泣、思はず走り寄)

「ウワウ、、、、(詰め泣ク)」

かみさん慾の皮のこの顔が、よふゆがまずに居てくれ
 た、今こそほつとり人間の誠の心に覺めました、お詫
 びしますこれかみさん、勘辨して下さいませ〳〵(急
 いだ口調で)可愛い娘さんにあの着物、失禮ながらお
 年玉、早ふ着せて上げて下され、強い兵隊さんをお父
 さんに持つた、ほんとにこの子は幸者じや」

「旦那様、ア有難ふござります、きつと〳〵このお禮
 は」

「禮もへちまも入りません、名譽の家を守るのは、銃
 後國民のお勤めじや、四海兄弟同胞の國は世界に日本
 一つ、サア〳〵婆さん、娘さんにその着物早ふ着せて
 上げなされ、お前さまああの着物早ふ着て来て下さい
 ませ」

「イエ〳〵私のものは入りませぬ、お情けにあまへあ
 の子だけ」

「ハテ、あやまつたこの爺父の心ざしを受けて下さ
れ」

とあなたをうろくくと、實に血は一つなる日の本
の國の譽れぞ頼もしき、

「ヲ、あれへ見へるは獅子舞じや、目出度今日の御祝
儀に、娘さんにも見せて上げよふ、ヲーイ獅子舞やい
く」

と、今は心も春風に、ふかれうかれて招かれて、勢ひ込
だる獅子頭、（これにて引道具）

てんくすててんく、そふれそれくお獅子で
ござる、唐のお獅子の生れを問へば、深い谷間に幾千丈
の、巖そびゆる清涼山よ、こんのお獅子は越後の生れ、
高い山から都を眺め、飛んで出でたるお獅子でござる、
てんくすててんく、四方の町々御客さまへ、
祝ひ納める正月の言葉、目出度くの若松さまよ、枝も
榮へる葉も繁る、濱の松風豊かに吹けば、今年しや豊年
稻穂が稔る、國も榮える御民も繁昌、御代も納まり四海
波風濱の眞砂は盡きるか知らず、國は盡せぬ我日の本に
生れ逢ふこそ御目出度いな、やんれ目出度御目出度ナと
祝ひ喜ぶ歌聲の實に有難き神國や、四海兄弟一元に結び
合ふこそ頼もしき。

忠孝一本は我が國
道義の精粹にして
忠誠の士は又必ず
純情の孝子なり

（戰陣訓）

流言蜚語は
信念の弱きに生ず
惑ふこと勿れ
動ずること勿れ

（戰陣訓）



中將姫雪責の段

中將姫	廣次	浮舟	岩根御前	下僕	桐の谷	豊成公	鶴澤友三郎
豊竹松太夫	竹本長尾太夫	竹本津磨太夫	竹本七五三太夫	竹本富太夫	竹本文字太夫	竹本住太夫	鶴澤綱造

鷗山古跡松

中將姫雪責の段

中將姫の當麻寺縁起物として、諸曲に古く「雲雀山」の曲が行はれてゐるが、淨曲でも元禄九年四月（二三五六）竹本座上演の「當麻中將姫」（作者不詳）があり、その改作が並木宗輔の「鷗山姫捨松」（元文五年二月二四〇〇豊竹座上演）で、その中最も名高いのがこの三段目の切雪責の段で、のち寛政九年二月（二四五七）道頓堀東の芝居で「中將姫古跡松」の外題でその三段目を出した事もあり、今日まで外題は一定してゐない。

梗概

横佩右大臣豊成の後妻岩根御前は至つて腹黒い人物だつた。岩根は大貳藤原廣嗣などと通じ、政治をめぐる陰謀に加擔して居た。

豊成の息女中將姫は親思ひの發明な娘だつたけれど、繼母岩根は何かにつけて中將姫が邪魔で、

人 形 役 割

岩	根	御	前	桐	竹	龜	松
大	貳	廣	次	吉	田	玉	市
中	將	姫	吉	田	光	造	
奴	角	内	吉	田	多	三	郎
奴	宅	内	吉	田	兵	次	
こし	元	浮	舟	桐	竹	紋	司
こし	元	桐	の	谷	桐	竹	紋
豊	成	公	桐	竹	政	龜	

事々に邪慳に振舞ふのだつた。そして下部林平とのあらぬ不義の濡衣を着せ姫を責めさいなんだ。それに夫豊成の秘藏の御物観音の像を盗まうとして姫に見られ、これが腹立たしくてならなかつた。岩根は一策を案じ出し、姫にこの観音像を預け置いた。そして腹心のものに姫の油斷に乗じてこれを盗ませ、紛失の罪を姫に塗り付けやうと企んだのである。

それは雪の降る日だつた。大貳廣嗣は、豊成の館に観音像を早く差出せと催促に來たのだつた。廣嗣は勿論岩根のからくりを知つて居た。どうやら奸計が豊成に勘づかれたらしくもあり、この上は中將姫を亡きものにするのが岩根たちには得策だつた。

七日七夜の責め苦に面やつれた中將姫は雪の庭前に引き出された。廣嗣は言葉も荒々しく姫を責めたけれど、佛像紛失について白狀する何物もなかつた。

心ない下部どもは手に手に割り竹をもつて雪にこごえる姫を打つた。その時、枝折戸の外へ駈けつけて來たのは侍女桐ノ谷だつた。桐ノ谷はかねてから岩根の邪な仕打ちを惡む姫の同情者の一人だつたのだ。

桐ノ谷はこの場へ入つて、却つて姫を助ける邪魔になつては、とひとり氣を揉むのだつたが、又も降りしきる大雪に姫の痛々しげな様子にたまり兼ね、自分の着て居る上着の一重をぬいで、切戸の中へ投げ入れた。

岩根はこれを見るより猶ほ苛だつて、自ら姫の髻をつかんで捻伏せ引き廻した。桐ノ谷はもう我慢が出来なかつた。枝折戸を破つて内へ駈け入つてこれを止めやうとした。此處へ奥から出て來たのは侍女浮舟だつた。浮舟は前々から岩根に肩を持つと見せかけて居て、實は姫の力になつて居たのだ。岩根に代つて姫を打つと、姫はそのまま悶絶してしまつた。

これを見た廣嗣も岩根も流石に驚いて、そしらぬ顔をして立つて行つてしまつた。

あとに浮舟は姫を抱き起すと、姫は眼を開いたそれは浮舟の教への通り、死んだと見せて居たのだつた。

人の來ぬ中と、立ち上る折しも、待て暫し、と聲を掛けたのは父豊成公だつた。

豊成は姫を此處に置いては爲にならないことを悟つた。そしてあくまでも姫を死骸として口をきくのだつた。

豊成は今日の岩根の仕打ちも知つて居た。しかし、この場合上御一人の御安泰を計るためには、岩根に頼み込んで置かなければならなかつたのだ。それを思ひ、責め苛まれる我が子を見殺しにする心の中の苦しさ、君のため、親のため、よくも艱難して呉れたと、姫に血の涙を絞つたのであつた。姫は桐ノ谷、浮舟兩人に伴はれて、雲雀山へと難をのがれて行くのだつた。

【夜の部】

戀女房染分手綱こひにようばうそめわけたづな

道中双六の段
重の井子別れの段



重の井子別の段

切竹本重太夫

豊澤慶助

本曲は寶曆元年二月（二四一一）大阪竹本座上演。作者は吉田冠子、三好松洛の合作。全篇は、東山の段、涼みの段、與作勘當の段、重の井訴訟の段、道成寺の段、孝行の段（沓掛村）、恩愛の段、道行、親里の段、道中双六、重の井子別れの段、旅籠屋の段、歸參の段、敵討の段の全十三段からなり、この中、重の井子別れの段はその第十段目に當るので、俗に「戀十」と云はれ、また「三吉愁の段」とも呼ばれてゐて、淨瑠璃に、又歌舞伎に度々上演され、人口に膾炙された一段である。

この「戀女房染分手綱」の原作は寶永五年（二六三八）大阪竹本座上演の、大近松作「待夜小室節」（後「丹波與作」と改題）で、これを改作し場敷を多くし、筋を複雑にし、舞臺上の技巧を豊富にし、お家物式に仕立直

人形役割

乳母重の井 桐竹紋十郎

馬方三吉 桐竹紋司

本田彌三左衛門 吉田玉徳

こし元お福 吉田常次

宰領 吉田藤一

宰領 吉田駒三郎

したものである。

因みに作者吉田冠子とは、人形遣ひの非常な名手初代吉田文三郎の作者名で、新作淨瑠璃の趣向、人形や舞臺の工夫など彼の獨創から數多のものが生れ、現在の人形芝居の基礎は彼により作られてそのまま今日まで傳來してゐる。（「義經千本櫻」の源九郎狐の人形衣裳に源氏車の模様を付けて今でもその衣裳のままを踏襲してゐるものもこの文三郎である。）謂はば、人形三人遣ひの大成者とも、且つ人形芝居の基礎を築上げた人とも云ひ、現在の人形遣ひが姓とする「吉田」の流祖でもある。斯の道の歴史の上に重要な位置を占める人である。

梗概

丹波の城主由留木家の息女調姫は、關東の高家入間へ養子嫁子として江戸へ下る約束が出来た。入間家からは奥家老本田彌三左衛門が迎へに來て用意萬端整ひ、いざ出立と云ふことになった。

所が未だ年齢は僅か十歳になつたばかりの姫君は、この東下りが嫌だと俄に云ひ出してむづかる

ので、お乳人重の井はじめ腰元たちは、手をつくして慰めたけれど、どうしても御機嫌が直らないので一同困りはててしまつた。

そこへ、丁度姫君と同じ年頃の馬子の三吉と云ふものが、東海道道中双六とやらを弄んで居ると云ふことが聞えるので呼び寄せて姫君の御機嫌をとらせやうと云ふことになつた。

三吉は御前近くの縁先へ來て、望まれるままに道中双六の繪解きを、ことば面白く囃したて、東國の珍らしい物語をするのですつかり姫君のお氣に入り、直ぐにも東へ下ると云ふことになつた。

さて、かうして頑是ない姫君が東へ下ると御意あつたのは何と云つても、馬方三吉の手柄であるお乳人重の井は、その褒美にと御前から下され物の菓子や、なにがしの錢を三吉に與へた。

すると突然、三吉は「由留木殿のお乳人重の井さまとはお前か、そんならおれが母様」となつ

かし氣に抱き附かうとするのだ。重の井は、この小さな馬方がわが子とは、まさかと驚くのだつたが、しかし、胸に覺えないことではないのだつた。

話は十年のむかしに溯らなければならない。

この由留木家の家老伊達與三兵衛の倅に與作と云ふものがあつた。重の井は能師竹村定之進の娘で、腰元として御殿奉公をして居る中、與作と何時か離れがたない仲になり、その間に與之助と云ふ男の子さへもうけたのであつた。

この不義のことが顯れ、悪者の讒言によつて與作は故國を追放され、馬方にまで零落してしまつた。重の井は父親の定之進の申譯の切腹により、與作と別れ、その後再び歸參して、姫君のお乳人となつたのだ。

今此處に馬方三吉から、母様とすがりつかれ、その身の上を聞かされ、證據の守り袋まで見せられてみると、三吉はまさに我が子の與之助に疑ひ

はなかつた。

三吉は現在父親の興作とも別れ、幼ない身で近江の石部に馬方奉公をして居るのだ。その望みと云ふのは、父親を尋ね出し、親子三人水入らずで一日でも暮したいと云ふのだつた。これを聞いた重の井は胸もくだけるばかり、現在我が子に馬追ひをさせ、おのれはお乳人よと衣裳を着飾つて居る心苦しさ、しかし今の場合母子と名乗つては、姫君のお名にも障ること、ただ氣も亂れてむせび泣くのであつた。

見るからに賢し氣な三吉に、人違ひと偽つても無駄なことは知れて居た。譯をよく話せば、と今までの物語を三吉に詳しく聞かせ、心を鬼にして今では母でも子でもないもの、とそのまま別れやうとするのだつた。三吉も聞き分けて立ち上つたが、その見すばらしい後影に又こみ上げて來る悲しさは、世が世ならば千三百石の世取りのこの子、雨風雪降りの夜道に馬追ふ姿も偲ばれ、

我が身を投げ伏して奉公の身の淺ましさを打歎いたのであつた。

時に奥口から、姫君の御立ちが知らされ、乗物も昇き寄せられた。

そして三吉が姫君のお伽にと、泣く泣く唄ふ、「坂は照る／＼」の馬子唄に、涙を嚙んではかない親子の別れをしたのであつた。

巴 御 前
竹 本 南部太夫
木曾義仲 豊 竹 伊達太夫
豊 竹 つばめ太夫
豊 竹 松島太夫
郎 黨 竹 本 隅若太夫

竹 本 源太夫
竹 本 雛太夫
竹 本 八十太夫
野 澤 松之輔
野 澤 八 造
鶴 澤 清 友
豊 澤 新 太 二郎
鶴 澤 一郎右衛門
鶴 澤 清 廣
野 澤 市治郎
野 澤 勝太郎

出

軍人援護強化運動参加作品
西亭作詞並作曲 大塚克三舞臺裝置
榎茂都陸平振付 しゆつ

(床本) 出 陣

陣

今ぞ秋得し出陣の、今ぞ秋得し出陣の、壽永の秋の嬉しきよ。されば保元も夢の跡、雨露に幾年木曾木立、今日ぞ錦の晴衣、これは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さても平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢侈専横に四海亂れ、我意暴戾に宸襟を御惱し奉る事、沙汰の限りにあるべき所長くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候、さらば疾く出陣致して、叡慮を安んじ奉らばやと存じ候。

如何に義仲が郎黨やある、まかり御前に候。一議もあるべき候程に、巴にこれへと申し候へ。仰せかしこまつて候。如何に巴殿御大將の御召し候、とく是へ御参り候へ。木曾山おろし烈しくて、木曾山嵐烈しくて秋の野分の身にしむも、君が恵みの温かき猛き、勇婦も情けにはなびく心の糸すすき、招く尾花に誘はれて、御前に木曾

人 形 役 割

木	巴	法	軍
曾			
義	御		
仲	前	師	兵
吉	吉	桐	大
田	田	竹	ぜ
光	榮	紋	い
造	三	太	
	郎	郎	

の女郎花。御召しによりて侍り候。これは巴候か、今ここに申すること候、我れこの度令旨を賜り候上は、急ぎ出陣あるべく候、生死不明は戦場の常、さる間おことには、幼時の一子義高を育て、後日の備へ怠りなく、留守居厳しく相守り候べし。仰せかしこみ候へども、そは情けなき御事にて候、義高君の御身、妹山吹に頼み置き候上は、夢氣づかひ候はず、この度の御義、一期の大事、なか／＼の御事ならず、一手一指もあだならざるの御時也。たとへ女の身なるとも、軍に立つは君への忠、武門の譽れ、國を鎮めの御戦に男女の候べき、それ日の本の女性として、申すも畏き御極み、その往昔の神后の後、妙なる御身に御劍を佩き、異夷鎮めの御舟出尊き英姿に敵もなし、誰れかおそれかしこまん、ましてや賤の、み民草心一すじ苧環のつながる糸のおみなえし、身は君恩に捨小舟、命は義による理りぞ、我が日の本の教へなれ是非に馬側の御供に、侍らせ給ひ候へかし。實に理りの事にて候、さらば山吹御前に後事を託し、出陣の供さし許すべし。こは有難き御言葉、過分の譽れ、この上や候べき。さらば先づ門出に八百武神に祈誓をなし、逆徒鎮護の御拜せん。實に／＼それよ傳え聞く、人皇五十有一

代時の帝の宣旨を受け、かの古への田村麿、東夷鈴鹿の惡靈惡鬼、討鎮めんと御門出に、觀音薩埵を祈らせて、普天の下卒士の中、いづく皇土にあらざるや、皇威に背く逆徒ばら、鎮め給へと祈願ある。軍を進めて東國や、轉々伊勢路の惡鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中、無二無三に割つて入り、八面六ひの勢に、惡鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の軍神、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞかしこれ、御加護の程ぞ奪けれ。いざ／＼故智に我れもまた、尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に、祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

それ天地の開けしより、國常立の御尊立たせ給ひて天ツ神七代の後の大神は、申すもおそれ、天照す恵みも高き日の本の、國は千代までゆるぎなき、惡鬼惡靈、異夷原、鎮護退散、四海波靜かに神の御聲振る、實に神さぶる神樂舞、實に神さぶる神樂舞。

巴は仰せ巖りて、巴は仰せ巖りて、はや出陣の晴れ戰さ、去る程に、扱も其後義仲兵信濃を出でさせ給ひしは

秋も仲空穗すすきの、なびく勢ひの二萬餘騎、義を泰山の兵等、轡並べて攻め上る、其の時平家の軍陣は、曾子維盛、惣大將、それに隨ふ十餘萬、たとへ幾百千萬とて、枯野の芒にことならず、何條恐れ申さんや、我れに正しき士道あり。義を一元の合戰に、神も力を添へぬべし、戰は我れに勝鬨の、えい／＼應の陣聲は、礪波の山にこたまして、木曾に名を得し四天王、一騎當千の勢は、秋のすすきを薙ぐがごと、すさまじきともすさまじき、さて俱利伽羅の火牛の計、谷へおちこち敵の軍、哀れ木の葉の木曾嵐、我れも初陣と木曾駒の、栗毛のひづめ、かつ／＼、是は木曾にて女武者、巴が晴れの出陣なり君の御爲に散る命、何惜しからぬ紅葉ばの、手折れや討てや人々よ、聲によせ來る諸軍勢、もとより好む長刀を柄長にしかと追とりのべ、右よ左りよ前後、二つ巴や三つ巴、まんじ巴と戰ひける、一息ふつとつく鐘の、折りしも壽永秋の暮れ、桔梗かるかや女郎花、千草すだく虫の音の、りん／＼きりり、松虫きぎす、聲は夜風に冥々たり、亡き兵を弔ひの我が武士道の情けには、敵も味方もおしなべて、松の恵みの下雫、松の恵みの下雫、皇が御徳のうるほふまで、いざ／＼征かん、勝つて兎の緒をしめて、勝つて兎の緒をしめて。

まんぢう娘



(17)

伊賀越道中双六

政右衛門邸の段
大廣間の段

唐木政右衛門邸の段

中
竹本 吉住 三太 太郎夫
野澤 仙呂 三太 太郎夫
豊澤 仙呂 三太 太郎夫
豊竹 古靱 太夫
鶴澤 清 六

梗概

天明三年（二四四三）四月竹本座初演。作者は近松半二、近松加作。忠臣蔵、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので近松東南作「伊賀越乗掛合羽」（安永六年三月二四三七）豊竹此吉座上演）の改作で、全曲は第一鶴が岡の段第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中、第六、第八と共にこの第五郡山屋敷（饅頭娘）の段が有名である。

人形役割

若黨 武助 吉田 玉徳

唐木政右衛門の留守宅では若黨武助が家事を引受けて忙しう働いてゐる。

女房 お谷 吉田文五郎

唐木政右衛門 吉田榮三

宇佐見五右衛門 桐竹門造

乳母 お倉 桐竹紋太郎

娘 おのち 吉田龜夫

母 柴垣 吉田多三郎

こし元 大ぜい

大廣間の段

大内記 竹本本源太夫

政右衛門 竹本本源太夫

林左衛門 竹本隅若太夫

隣家の腰元ども連れ立ち來り「今夜は政右衛門様の御婚禮なさうな。お手傳ひに参りました」とて互に政右衛門の女房お谷の離縁話や今夜來る嫁御の事など話に花を咲かせる。

お谷は物思ひに沈んで戻り、この様子を見て泣き倒れ「今まで夫婦となつて助太刀を心頼みにした夫との縁が切れては最早敵討の本望も遂げられぬ」と苦悶する。武助は慰め顔に「拙者命に代へても御離縁はさせませぬ。お前のお腹の御子が平産なさつたら切れても切れぬ血筋の縁。さて今宵の銚子につける蝶花形の折り様知りませぬ。お前様に頼みます」と云はれてお谷は心ならずも蝶花形を折る。折から政右衛門の歸へりときいて奥の室に隠れる。

政右衛門は志津馬の敵討の助太刀をしたくても親の許るさぬお谷との内縁の間柄では表向きの助太刀もならぬのでお谷を離別して、僅か七歳になるお谷の妹おのちと正式の婚儀を舉げる。その席

伊賀越
道や双六
此方未の屋敷の
此方樽下
曲豆竹古鞠太夫
相勤申候

おむ

るを来わ

柴垣

ちの

友友

在島

二六

人形役割

五右衛門 豊竹 千駒太夫

近習 豊竹 つばめ太夫

近習 豊竹 松島太夫

鶴澤 寛治郎

譽田 大内記 吉田 玉助

唐木 政右衛門 吉田 榮三

櫻田 林左衛門 吉田 玉市

宇佐見 五右衛門 桐竹 門造

小姓 桐竹 小紋

近習 吉田 兵次

近習 吉田 萬次郎

で、可愛い花嫁御は器に盛った饅頭を欲しがり又嫁入りに持参した玩具を並べて人を笑はせる。これより先き、お谷は離別された時、かくては親の仇討の助太刀を頼む望みも絶え、と悲嘆にくれて親代りの宇佐美五右衛門に語り共に怨みかこつたが、政右衛門の後添へがおのちと知つて夫の底意を悟り感謝の涙に訣をしぼる。五右衛門も心が解けて感激した。

政右衛門はこの時「御恩深い五右衛門様にお頼み申しますが、貴方は明日切腹していただき度い其の譯は折角拙者を推薦して下されたが櫻田林左衛門との試合に私が勝てば主君からお暇の許しが出まい。よつてわざと負けます。さすれば私を推薦された貴方の面目丸潰れとなつてお腹を召されねばならぬと存じます」と語つた。流石武士の五右衛門は快く之を得心した。

其翌日政右衛門は林左衛門との劍術試合に負け

て暇を乞はうとした。然し賢君譽田大内記は五右衛門の切腹しようとするのを止め、政右衛門の手練を譽めて加増を申し渡された。そして大内記に秘傳を傳授した、政右衛門は今こそ暇を頂戴し、銘刀を餞別に賜はる。政右衛門は主恩に感泣し御前を拜して退出する。

文樂座小史（昭和十八年調査）

○竹樂座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座焼失
大正十五年十一月二十九日

○臨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ
始メ其他臨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

酒

屋

の

段

前

野竹鶴竹

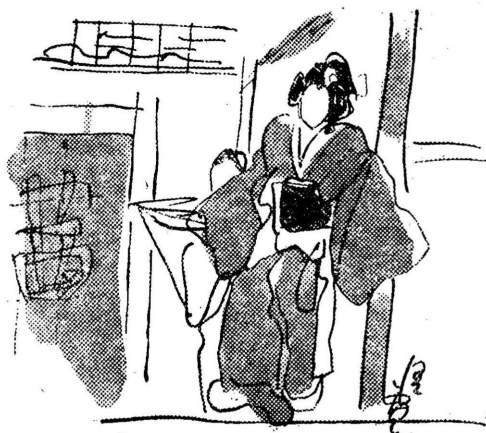
澤本澤本

喜伊重南

左達部

衛太夫

門夫造夫



半三
七勝
艶容女舞衣

酒屋の段

元祿八年十二月六日（二三五五）の夜、大阪長町四丁目の女舞の藝人三勝は大和五條の昔屋半七と馴染み、遂に愛兒お通を残して千日墓地の側で情死したが、この事件を翌九年正月大阪の岩井半四郎座で「昔の色揚」の外題で上演し、これが大評判となり歌祭文にも作られて流行し、その廿五回忌には、紀海音が「笠屋三勝二十五年忌」と題して初めて淨瑠璃（享保四年〓二三七九〓上演？）に仕組んだ。更にこの改作として延享三年十月（二四〇三）には春草堂作「浮名茜染五十年忌女舞劍紅風」が上演されたが、この筋立を受けて更に新工夫をこらしたのが「艶容女舞衣」で、作者は竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七、安永元年（二四三二）十二月大阪豊竹座に上場された。全曲は上の巻「生玉、島之内茶屋」中の巻「新町橋、長町」下の巻「今宮戎、上塩町（酒屋）」の三巻六段に分れ、全段には郷土大阪の風物詩的な情緒も巧みに取り入れて筋を發展さし、殊に「今頃は半七さ

人 形 役 割

後 竹鶴本 南部太夫
野澤本 喜伊重 達太夫
琴 鶴澤 寛 子

半兵衛女房 桐竹政龜
親 宗 岸 桐竹門造
嫁 お 園 桐竹紋十郎
舅 半兵衛 桐竹龜松
娘 おつう 桐竹小紋
茜屋半七 吉田玉男
美濃屋三勝 桐竹紋司

梗 概

ん」で知られた酒屋の段が有名で全篇の山となつて居る
茜屋は大和五條の名ある家であつたが、逼塞して大阪に出で、上塩町三丁目格子構への家に酒店を出し、老夫婦は一子半七に妻お園を迎へ、丁稚長太を使つて細まやに暮してゐる。

多の日暮れ頃三勝は幼児を抱いて來り「進物にしますのですが、お宅の柄樽に銘酒を一升詰めて下さい」と言うて代金を拂ひ、長太を頼み之に其の柄樽を持たせて去つた。

入違ひに半兵衛は町年寄、五人組の人たちと共に代官所から歸る。彼は我が子が人を殺した罪を引受け、縛り縄を掛けられたのを着物で隠してゐる。半兵衛の妻は何故に夫が代官所に呼ばれたのかと案じてゐるので、半兵衛は「呼ばれたのは別に變つた事でもなかつた」と安心させるのだつたやがて長太は柄樽を持ち、幼児を抱いて泣き乍ら歸つて來て「今の女が途中で、ちよつと用達し

て来るからと、この兒と柄櫓を預けて何處かへ行つたまま、ゐくら待つても歸へつて來ない」と云ふ。其櫓には「進上茜屋半兵衛様」と、張紙がしてあるので老夫婦は不審に思ふ。

折から宗岸はお園を連れて來り、娘を取戻した過ちを謝し「どうぞ元通りにお園を半七の妻として下さい」と頼む。お園も「お氣に召さずとも哀れと思召されて、元の儘に嫁として使つて下さい」と涙に袖を濡しつゝ願ふ。然し半兵衛は我が子半七の不身持から、お園の行末を氣の毒に思つて承知しない。そこで宗岸は貞心堅固なお園の心を思ひ遣り、子を思ふ親心のせつなさを語り、同時に半兵衛が我が子の殺人の罪を被て、縛られてゐる事を指摘し、同情の涙にくれた。之を聞いて老婆ははつと驚き顔を曇らす。半兵衛はかねてお園の美しい心に感じ「こんな嫁は世に稀な嫁鑑、去せともないは山々なれど、此方に置けばこのままの若後家、それがゐたはしい」と聲を上げて噎び入

る。そして「内密の話がある」とて妻と共に宗岸を誘うて奥に入つた。

お園は獨り取殘されて夫の身を案じ「今頃は半七様何處にどうしてござらうぞ」と斷腸の念に消入るばかり。折節先刻の拾ひ兒が目を覺し、乳を吞まうとしてお園の膝に這寄る、お園は之を見て、お通であると驚く。半兵衛も宗岸もまろび出て、「半七三勝が仲に生れたと云ふのは此の兒か」と眺め入り、女兒の懷を探つて書置を取出した。其の文に細々と不孝を謝し、殺人罪を犯した事を述べ、お園にも託びて來世の契りを誓ひ、氣に懸るのはお通が事、何卒子と思し召して養育の程、かへすゝも頼み上げますとあるので、相寄つて互ひに讀んでは泣き、泣いては讀み、行燈の灯も幽しにばだたく下に、満座哀愁の氣につつまれた。戸外ではひそかに三勝半七が來て、掌を合せて親を拜み子を思ひ、千萬無量の感慨に名殘を惜み、血の涙を拭ひながら死出の旅へと急ぐ……。

京阪神松竹系各座
十月興行お知らせ

大阪歌舞伎座
八二八二 戎 電

戦力増強の秋に展く
大歌舞伎十月興行
毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一 二 三 菊 櫻
等 等 等 席 席 席 席
四 二 一 一
〇 〇 〇 〇 〇 〇
(税別)

大阪中座
九七二一 南 電

松竹家庭劇
二の替り公演
毎日 晝十二時半 二部開演
夜五時

特 一 二 三 四
等 等 等 等 席 席 席 席
二 一 一 一 一
〇 〇 〇 〇 〇 〇
(税別)

大阪角座
〇一二二 南 電

決戦下ノ國民演劇の精華ノ
前進座十月公演
毎日 晝正午 二部開演
夜五時

特 一 二 三 四 五
等 等 等 等 等 席 席 席 席 席
四 三 二 一 一 一
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
(税別)

大阪辨天座
八七二南 電

昭和演劇
新魅力藝能祭
毎日正午より二部開演
日曜・祭日十時開演

一 等 椅 子 土 間
席 席 席 席
一 七 五
〇 〇 〇 〇
(税別)

大阪あべの劇場
五八九三 戎 電

大阪中て一番安い
笑ひの劇場
毎日正午より二部開演
日曜・祭日十時開演

御観劇料
階下席 七五
階上席 一二五
(税別)

大阪浪花座
九五四一 南 電

新興演藝特輯番組
毎日正午より二部開演
日曜・祭日十時開演

御観劇料
階下席 九一
階上席 一六三
(税別)

大阪大劇
一三二 戎 電

六日マデ
大船の花形實演
七日ヨリ
秋のをどり
松組・竹組合同公演

同時上映々々
一週 菊水とはに
二週 熱風
三週 富士に響ふ
四週 火砲の響
五週 假面の舞踏

京都南座
五五一 一國 電

厚西大生
關西大歌舞伎大合同
東京新派
毎日 晝正午 二部開演
夜五時

一部御観劇料
四等席 五〇
三等席 八六
二等席 二七五
一等席 二七五
(税別)

戸神場劇竹松
四〇四四 川 電

藝術座
水谷八重子一座
毎日四時半開幕
日曜晝間興行
正午と五時二部開演

御観劇料
一 二 三 四 五
等 等 等 等 等 席 席 席 席 席
三 一 一 一 一
〇 〇 〇 〇 〇
(税別)

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は

曾に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は

一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお願ひ致します。

御休憩の間は

一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辨當御持参の御方は何卒御利用下さい。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

入口東側でお渡し致します。

案内人は

胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御中附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相動めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に

致しました。御一程次第登壇、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南 〇三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年九月 卅日印刷
昭和十八年十月 一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
總發行所 鳥江 鏡也

鏡也

一部
金二十錢

